

都久夫須麻神社本殿の脇羽目彫刻について

—— 都久夫須麻神社研究序説 ——

《キーワード》 都久夫須麻神社 建築彫刻 豊臣秀頼 豊国廟 安土桃山時代

木村 展子

(神戸大学大学院文化科学研究科助手)

はじめに

滋賀県の竹生島にある都久夫須麻神社本殿の脇羽目彫刻は、安土桃山時代を代表する美術作品としてしばしば取り上げられるが、その、他にはみられない大ぶりの牡丹と渦を巻くような唐草の意匠は大胆で、安土桃山時代の自由な息吹を感じさせる(図1)。しかし、図柄の途中で切断されており、一見して本来別のところにあつたものを後からはめ込んだ事が明白である。

後述するように、都久夫須麻神社本殿は本来身舎部分と庇部分¹別の建物であり、それを慶長七年(一六〇二)に合成して現在の姿になったものである。身舎部分も桃山芸術の粋を集めた建築として非常に有名であるが、本稿では都久夫須麻神社研究の第一段階として、庇部分の脇羽目彫刻が本来いずれの建物を装飾していた彫刻であるのかという問題を中心に考察する。

都久夫須麻神社には宝巖寺が隣接するが、その唐門は豊国神社の社僧である神龍院梵舜の日記『舜旧記』の記述や渡廊から発見された墨書より、豊臣秀頼によって慶長四年(一五九九)に造営された豊国廟の遺構を慶長八年(一六〇三)に竹生島に移築したものであることが判明している。一方、都久夫須麻神社本殿は慶長七年(一六〇二)に豊臣秀頼によって造営されたもので、社伝によると伏見城の遺構であるという。都久夫須麻神社本殿に関しての本格的な研究は少なく、建築関係では昭和十一年に現状変更をとまなう解体修理をした際に出された乾兼松氏による修理工事報告書²と、昭和五十八年に発行された『日本建築史基礎史料集成 社殿Ⅲ』³所収の桜井敏雄氏による「都久夫須麻神社本殿」のみである。漆工関係では灰野昭郎氏の「都久布須麻神社本殿の蒔絵装飾」⁴がある。さらに宝巖寺に関しては、唐門・観音堂・渡廊ともに昭和十年に解体修理工事、昭和三十五年に災害による部分修理工事、昭和四十七年に屋根葺替

工事を行っているが修理工事報告書は刊行されておらず、また論考もない。いずれにせよ、都久夫須麻神社と宝巖寺は豊臣秀頼によって続けて造営されていることから、都久夫須麻神社本殿を考える際には宝巖寺についての考察が不可欠である。

一、建物の現状と前身建築

現在竹生島には都久夫須麻神社と宝巖寺があるが、明治の神仏分離令で分かれるまでは宝巖寺は都久夫須麻神社の神宮寺であり、今も都久夫須麻神社本殿は懸造の渡廊で宝巖寺観音堂とつながる。観音堂の側面には唐門が接続し、門の横手の石段を上がると宝巖寺弁才天堂（本堂）がある。峰の斜面に建てられているため、この二堂一社は石段で繋がれ、変化に富んだ景観となっている。都久夫須麻神社本殿と宝巖寺唐門は国宝、観音堂と渡廊は重要文化財に指定されている。なお、宝巖寺弁才天堂は昭和十七年に再建されたものである。

一—— 宝巖寺

宝巖寺はかつては鐘楼や三重塔、または多くの僧坊があったが、今では本堂、観音堂とそれに付属する唐門と渡廊からなっていて、観音堂、唐門、渡廊が慶長八年に豊臣秀頼によって再興されたものである。唐門は一間一戸の向唐門で松皮葺、観音堂は桁行五間梁間四間の入母屋造・松皮葺、渡廊は二つの部分に分かれ、低屋根部分は桁行八間梁間一間の切妻造・松皮葺、高屋根部分は桁行二間梁間

一間の切妻造・松皮葺となっている。棟札が一枚発見されており、それには慶長八年に一島の伽藍すべての再興が終わったことが記されている。総奉行が片桐且元、作事奉行が雨森長助、大工は竹生島の御大工、浅井郡富田村の阿部氏で慶長八年当時の当主は太郎兵衛宗政、小工は同じく富田村の西島氏で代々竹生島の小工を勤めている。

宝巖寺唐門は『舜旧記』慶長七年六月十一日の条の「今日ヨリ豊国極楽門、内府ヨリ竹生島へ依寄進、壞始、新神門、大坂ヨリ被仰了、」という記述から、豊国廟の遺構であることが判明している。さらに、渡廊の飾金具から「豊国大明神御唐門下長押金物」という墨書銘が見つかっている。しかし『舜旧記』に言う「極楽門」「神門」が具体的には豊国廟のどの門を指すかは明らかではない。豊国廟は慶長三年八月十八日に亡くなった秀吉の霊廟として慶長四年四月十八日に建てられたものであるが、当初秀吉の死は隠されていたため、名目上方広寺の鎮守として造営された。場所は方広寺（現在京都国立博物館）の東で、阿弥陀ヶ峰の山頂に墓所を建てその西麓（現京都女子大学付近）に豊国大明神社を建立したという。現在東山に豊国神社があるが、明治になってから方広寺跡に建てられたもので、慶長四年に建てられた豊国廟は現在は跡形もない。その豊国廟がどのような規模、構成、外観であったか知る手がかりになるのは、徳川黎明会と豊国神社所蔵の「豊国祭礼図」や桃山時代から江戸初期にかけて多数制作された「洛中洛外図」等の絵画史料と『匠明』『愚子見記』の二つの木割書である。絵画史料からは楼門以外の門は本社を取り囲む透塀に取りつく唐門しか認めることができ

